

# 「機能している資本の弾力性」と「資本の膨張力」

川 鍋 正 敏

マルクスは『資本論』において、生産の規模の拡大・蓄積の促進ということに密接に関連する問題として、「機能している資本の弾力性 die Elastizität des funktionierenden Kapitals」および「資本の膨張力 die Expansionskraft des Kapitals」とについてのべている。『資本論』における恐慌理論について考察するにあい、この問題は重要な論点の1つとなると考えられるのであるが、これまで比較的論究されることのすくなかった問題のうちにかぞえることができるように思われる。

わたくしは、小稿において、この問題について若干の考察を試みたい。

## 1

『資本論』第1巻第7篇第22章・第23章、第2巻第3篇第18章等において、マルクスは、「機能している資本の弾力性」および「資本の膨張力」について関説しているが、まず、前者についてみることにしよう。

マルクスは、これについて、およそつぎのようなことをのべている。

一定の価値額である前貸貨幣資本は、「生産資本に転化されてからは、生産的な潜勢力 produktive Potenzen を含んでおり、この力は前貸資本の価値限界 Wertschranke によって限界 Schranke を与えられているのではなく、ある範囲内 Spielraum では外延的また内包的に種々に違った働きをすることができる」(Werke 版、第2巻、357頁、訳文は以下すべて国民文庫版による。ただし、部分的に改訳した。)すなわち、一定額の資本——生産手段と労働力の価格と量によって与えられる——が、「価値形成者および生産物形成者として作用する範囲 Umfang は、弾力的 elastisch であり、可変的 variabel」(同上)であって、生産は前貸資本の価値限界をのりこえることができる、換言すれば、一定の価値額の資本がどれだけの生産をするかは、その価値額によってリジットにはきまらないものである。こういう意味において、資本は「弾力的な潜勢力 elastische Potenzen」・「1つの膨張力 eine Expansionskraft」をもっている。

資本がこのような「弾力的な潜勢力」をうるのは、資本が労働力と「生産的に利用される自然素材」(第2巻、335頁)と科学や技術を自分に合体する einverleiben ことによってである。

すなわち、「労働力への支払は同じでも、労働力は外延的または内包的にいっそう大きい強度で搾取される」(同上)——「労働力の弾力性 die Elastizität der Arbeitskraft」(第1巻、630頁)——から、原料への追加支出を前提するだけで、可変資本および固定資本への追加支出なしに同じ固定資本がその使用時間の延長や充用の強化によっていっそう有効に利用される。こうして労働力の「緊張 Spannung」を高めることによって生みだされる追加労働によって、「剰余生産産物と剰余価値、つまり蓄積の実体を、不変資本部分の比例的増大なしに」(同上)増大させることができる。

「生産的に利用される自然素材——それは資本の価値要素をなさない——すなわち土地や海洋や鉱石や森林などは、貨幣資本の前貸をふやさなくても、同数の労働力の緊張を強いることによって、内包的または外延的にいっそう高度に利用される。こうして、生産資本の現実の諸要素は、貨幣資本を追加する必要なしに、ふやされる。この追加が追加補助材料のために必要となるかぎりでは、資本価値が前貸しされる形態としての貨幣資本は、生産資本の効果の拡大に比例してはふやされず、したがってその程度まではけっしてふやされないのである。」(第2巻、355頁、傍点——川鍋。)

また、科学や技術の発展につれ、労働の生産力はたえず発展するが、「実質賃銀はけっして労働の生産性に比例しては上昇しない」から、「同じ可変資本価値がより多くの労働力を、したがってまたより多くの労働を動かす。同じ不変資本価値がより多くの生産手段に、すなわちより多くの労働手段、労働材料、補助材料に表わされ、したがってより多くの生産物形成者ととも価値形成者を、または労働吸収者を供給する。それゆえ、追加資本の価値が不変ならば、またそれが減少してさへも、加速された蓄積が行われる。再生産の規模が素材的に拡大さ

れるだけでなく、剰余価値の生産が追加資本の価値よりも速く増大する<sup>1)</sup>。(第1巻, 631頁, 傍点—川鍋。)

要するに、一定額の前貸資本は、労働力と土地と科学や技術を自己に合体することによって、自己の力として現わし<sup>2)</sup>、ある限界のなかでは、「資本がそれとして存在するところのすでに生産された生産手段の価値と量とによって画された限界をこえて」(第1巻, 631頁, 傍点—川鍋)、生産の規模を拡大することができ、したがって新しい資本素材として役立つべき生産物の量を大きくすることができるのである。

わたくしは、蓄積の進展・生産規模の拡大したがって大量生産 die Massenproduktion の発展について考えるばあい、前貸貨幣資本が生産資本としてもっている上述のような「弾力的な潜勢力」およびその作用を看過し

1) 科学や技術の発展と「資本の潜勢力」との関連について、マルクスは、なおつぎのようなことをのべている。

「……化学の進歩は、すべて、有用な素材の数をふやし、すでに知られている素材の利用を多様にし、したがって資本の増大につれてその投下部面を拡大するが、ただそれだけではない。それは、同時に生産過程と消費過程との排泄物を再生産過程の循環のなかに投げ返すことを教え、したがって、先だつ資本支出を必要としないで新たな資本素材をつくりだす。ただ単に労働力の緊張を高めることによって自然的富の利用を増大することと同様に、科学や技術は、機能ちゅうの資本の与えられた大きさには依存しない資本の潜勢力, eine von der gegebenen Größe des funktionierenden Kapitals unabhängige Potenz seiner Expansion をつくりあげる。同時に、この潜勢力は、原資本のなかのすでに更新期にはいった部分にも反作用する。原資本は、その新たな形態のなかに、その古い形態の背後で行なわれた社会的進歩を、ただで合体する。もちろん、このような生産力の発展には、同時に、機能ちゅうの諸資本の部分的な減価がともなう。この減価が競争によって痛切に感ぜられるかぎり、おもな重圧は労働者にかかってくる。すなわち、労働者の搾取を強めることによって、資本家は損害を補填しようとするのである。」(第1巻, 632頁, 傍点—川鍋。)

2) いうまでもなく、このようなことは、歴史的具体的な事実としては、工場制度 Fabrikwesen の発展、なかんずく機械による機械の生産という「工場制度自身の技術的基礎の確立」(第1巻, 474頁)によってはじめて可能となった。したがって、マルクスは、このような「資本の潜勢力」を「工場制度の巨大な突発的な拡張可能性 die ungeheure, stoßweise Ausdehnbarkeit des Fabrikwesens」(第1巻, 476頁)、あるいは、「拡張能力 Ausdehnungsfähigkeit」ともいっている。

てはならないと考える。

## 2

上述したように、ある一定の価値額である前貸資本は、生産資本に転化されてからは、その価値額によって画された限界をこえて、生産の規模を拡張することができる「弾力的な潜勢力」を含んでいるのであるが、これに加えて、このような力を発揮しうる生産資本へ転化すべき前貸資本それ自体も、「けっして固定した大きさではなく、社会的富のうちの弾力的な1部分 ein elastischer Teil」(第1巻, 636頁, 傍点—川鍋)をなすにすぎないものであり、いわば、前貸資本の「価値限界」そのものがきわめて「弾力的」であって、この前貸資本の「弾力性」によって資本の生産拡張能力は、それだけいっそう増大することができる。

前貸資本の増大が、さしあたり剰余価値の資本への再転化の増進によって行われることは、いうまでもないことであるが、この過程において、うえにのべた「機能している資本の弾力性」の増大と蓄積の増進とは、相互に作用しあい、両者ともに加速的に進んでいくであろう。

さらに、個別資本家によって前貸しされるべき貨幣資本の「価値限界」は、信用による社会に散在する貨幣手段—これは蓄積の進展とともに増大する—の個別資本家の手中への動員によって、いわば一挙にかつ大幅に拡大されることができる。とくに、信用を「槓杆」の1つとする少数の資本家の手中への諸資本の集中の進展は、それら少数の個別的諸資本の大きさを、社会的資本の大きさが絶対的に増大しなくても、一挙に増大させることができ、したがって、資本の「弾力的な潜勢力」を飛躍的に増大させ大規模な生産を可能とさせるという点で重要であろう。

マルクスは、「機能している資本の弾力性の増大」・「資本がその弾力的な1部分をなすにすぎない絶対的な富の増大」・「信用がこの富の異常な部分を追加資本として生産に用立てる」こと・「生産過程そのものの技術的諸条件、機械、運輸機関、等々が、最大の規模で、追加生産手段への剰余生産物の最も急速な転化を可能にする」ことを、「突発的な資本の膨張力 die plötzliche Expansionskraft des Kapitals」を増大させる要因として指摘している(第1巻, 667頁)。

そして、他方では、「突発的な資本の膨張力」の作用による「生産規模の突発的な発作的な膨張」が要求する追加労働力は、「現実の人口増加の制限 Schranke」にかかわることなく、ただちに「相対的過剰人口」から供給

されること、「社会的富、機能する資本、その増加の範囲と精力、したがってまたプロレタリアートの絶対的な大きさとその労働の生産力、これらのものが大きくなればなるほど、産業予備軍も大きくなる。自由に利用しうる労働力は、資本の膨張力 *Expansivkraft des Kapitals* が発展させられるのと同じ原因によって、発展させられる」(第1巻, 673頁, 傍点—川鍋)ことを指摘している。

このようなマルクスの指摘から、わたくしは、前貸資本の大きさの「弾力的」な変動および生産資本における「弾力的な潜勢力」の増大を、資本制生産に特有の、その生産規模の突発的な拡張を可能にするところの「資本の膨張力」と資本が自由に利用しうる労働力を増大させるモメントとして、とらえなければならないと考える。

## 3

ところで、マルクスは、剰余価値の創造の過程である直接的生産過程の「制限 *Schranke*」について、つぎのようにのべている。

「必要な生産手段、すなわち資本の十分な蓄積を前提すれば、剰余価値の創造には、剰余価値率すなわち労働の搾取度が与えられていれば労働者人口のほかにはなんの制限もなく、また労働者人口が与えられていれば労働の搾取度のほかにはなんの制限もない。」(第3巻, 253頁)。

しかし、剰余価値の生産を目的とし推進動機とする資本にとっては、この3つの「制限」——生産手段(資本蓄積)、労働者人口、労働の搾取度——は、決して所与の固定したものではなく、資本は、これらの「制限」をたえず「克服 *überwinden*」しようと努め、そして資本制生産様式のもとで可能なかぎりその克服を行いながら、生産力を絶対的・無条件的に発展させようとする。資本は、資本制生産様式のもとで可能なかぎりでの「制限」の「克服」をたえず行っていくのであるから、「制限」それ自体も、資本にとって「弾力的」なものにすぎないといえるであろう。

上述の、生産資本における「弾力的な潜勢力」の増大および前貸資本の大きさの「弾力的」な変動をみずからの発展のモメントとして含みながら行われる「資本の膨張力」の発展過程、それとともにすすむ「相対的過剰人口」の増大過程は、資本による直接的生産過程における「諸制限」の「克服」過程にほかならないと考えられる。しかも、この「克服」過程は、当然のことながら、もっぱら生産規模の拡大、したがって大量生産の加速的な発展を帰結するものなのである<sup>3)</sup>。

以上、わたくしは、マルクスのいう「機能している資本の弾力性」=生産資本における「生産的な潜勢力」および「資本の膨張力」とはなにか、その内容と作用とについて簡単な考察をしたのであるが、おわりに、それらが恐慌の問題の理論的究明にとってどのような意義をもつか、この点を指摘してむすびにかえたい。

恐慌が周期的・突発的に爆発するにいたるのは、一般的にいえば、資本制生産における矛盾の諸契機の「外的独立化」がある程度まで強行されうるからにほかならないが、諸契機の独立化が強行されうる基礎は、再生産過程が「巨大な弾力性 *die ungeheure Elastizität*」をもっているからであって、いわばこの再生産過程の「弾力性」の一翼をになう要因として、上記のものをあげることができるであろう。というのは、生産資本における「弾力的な潜勢力」は、直接的生産過程における「諸制限」の「克服」において一定の役割を果たし、「資本の膨張力」を増大させ、この「資本の膨張力」は、また、再生産過程の「弾力性」を巨大化させるもの<sup>4)</sup>にほかならないからである。上記の2要因は、再生産過程の「弾力性」の増大によって一定の作用をおよぼし、「近代的過剰生産の基礎 *Grundlage*」の1つをなす「生産諸力の無条件的発展、したがって大量生産」(『剰余価値学説史』*Werke* 版, 525頁)を可能とさせる諸要因の一環として、恐慌理論のうちに位置づけられるべきものであると思われる。

3) なお、マルクスにおける「制限 *Schranke*」と「限界 *Grenze*」という言葉の用い方および資本制生産の諸制限と恐慌との関連について一般的な考察をくわえられたものとして、さしあたり、大島清氏の論文「資本主義的生産の制限と恐慌」(『久留間鮫造教授還暦記念論文集「経済学の諸問題」』所収)をみられたい。

4) ちなみに、この再生産過程の「弾力性」の巨大化は、産業循環の周期の短縮化に一定の影響を与えるものと考えられる。というのは、市場の拡張に生産が対応しうる速度をはやめるからである。